

京都市の将来の都市構造について（「10年後に目指す都市構造の方向」と部会意見・委員会意見等との対応）

（注）右側の3都市構造の方向①～⑤に対応する左側の主な意見を同じ色でマーキングしています。

まちづくり部会における主な関連意見

新たな視点

- 時代認識・時代潮流が変化しており、新たな価値観に基づき考えることが必要。
- 日々の生活をどのように実現するかを見据えたハード整備であるべき。
- 社会的制約の中で実行すべきことを選択すべき。
- 環境問題を国際的に議論すると、地域性に配慮しない環境技術が進展する。京都は景観と環境を調和させる方策を考えることが必要。
- 温室効果ガス 25%削減は、生活に関わりが深い。時代の転換点において、新しい生活スタイルを提示し、市民の背中を押す計画であるべき。
- 景観保全が活性化と対立するのではなく、活性化につなげる必要がある。

まちの特性を生かす

- 歴史と文化に優れたまちの特色を生かすべき。
- 町家などの地域資源を市民や行政がどう活用するかが大事。
- 関西という広域的な視点や日本全体の中での京都、世界との交流といった視点も必要。

都市構造

- 重層性を持った都市構造を踏まえることが必要。
- 低成長時代、低投資時代の都市のあり方について、どのような土地利用を誘発していくかビジョンを示すことが必要。
- 交通は人々の出会い、コミュニケーションに貢献し、生活に直結するものとして捉えるべき。
- 公共交通は赤字を前提に、市民の足の確保を考えるべき。
- 土地利用と公共交通の将来像を市民に示し、一緒に考えることが必要。
- 狭い道に小さい家が密集するところは地震に備えて、対策が必要。

市民によるまちづくり活動

- まちづくりには地域の人に関わるのが重要であり、継続的に集まれる場が必要。
- 都市インフラの運用にも市民に関わる協働型の取組方向を目指す。
- 実際の活動を進めている既存の活動団体を力強く応援することが必要。
- 住民の自発的な景観づくりの活動を進めることが必要。
- 地域のまちづくりを支援し、地域のルールづくりを進めることが必要。

融合委員会及び委員ヒアリングにおける主な関連意見

低炭素のまち・京都

- ものづくり、なりわい、交通・まちづくり、住まいと暮らしのあらゆる場で、2050年までに二酸化炭素の排出を80%削減し、森と自然の享受できる持続可能な低炭素のまち・京都をつくる最初の10年とする。
- エネルギー多消費型の都市構造と暮らし方から、二酸化炭素80%削減社会を実現するため、低炭素型ストックへの移行拡大、再生可能エネルギーの拡大、公共交通と歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり、緑と自然を育て活用し、知的科学技術と伝統技術、歴史と文化を融合させた低炭素時代のまちづくり産業・グリーンビジネスの拠点として、若者から高齢者まで魅力ある低炭素のまち・京都をつくる。

都市構造について

- 人口減少時代を見据え、これからは土地利用の根本的な見直し求められる。
- 日本の都市の先端モデルを示す先駆的な考え方を打ち出すべき。
- サステナビリティ（持続可能性）とアイデンティティ（独自性）を整合させる概念を総合的に考えることが必要。歴史・文化と環境を組み合わせたまちづくりを。
- エコ・コンパクトシティについて、京都のまちの規模は、コンパクト化は可能だろうが、周辺を切り捨てるのではないため、よい言葉で表現が必要。
- 「エコ・コンパクトシティ」について、今住んでいる人に便利な所へ移って暮らしてほしいとはいえないため、超長期の課題ではないか、また、山間部や農業、林業を守る議論をしている中で、コンパクトシティの議論は、理論化しないと、コンセンサスを得ることは困難。
- コンパクトシティは、ゆとりを持ったローコスト、ローエネルギーの暮らしともいえる。地域ごとの魅力を活かす地域再生を考えるべき。
- 地域拠点について、都心部だけでなく、山間地域の自然・文化をどうとらえていくのかという視点も必要。
- 拠点づくりという言葉は、五大事業のようなものをイメージしやすく、誤解を招く。郊外にも拠点は必要であり、また既存集落のストックを再整備することも求められる。
- 人口減少の中で、ゆとりある暮らしへ質を向上させ、外にも魅力をアピールし、外からの人の流入により交流を生み出すことが大事。夜間人口だけのまちづくりではなく。
- 地域がネットワークするコンパクトなまちづくり、モザイク状のまちづくりが基本。これからは、それを地域主体や住民主体で、もっと目に見える形で取り組むという方向。
- マネジメントについても、道路や上下水といった都市基盤の効率的な経営の視点が重要。

未来像（第4回融合委員会への提案予定）

暮らしと自然環境が豊かに調和する
『環境共生と低炭素のまち・京都』

歴史・文化を創造的に活用し、継承する
『日本の心を感じるまち・京都』

伝統と知恵を活かし、豊かな生活を支える
『環境と社会に貢献する産業が育つまち・京都』

市民が共に学び成長し、未来を担う若者が育つ
『学びのまち・京都』

いのちと暮らしを守り、安心・安全で幸福を実感できる
『支えあい自治が息づくまち・京都』

都市構造の方向

1 基本的考え方

- ・京都市基本構想に定められた「保全、再生、創造」の考え方を都市構造の大きな枠組みとして継承し、歴史・文化と環境が調和する、コンパクトで歩いて楽しいまちを目指す。

2 長期を見通す新たな視点

- ① 持続的な都市づくり
 - ・地球環境への負荷が少ない都市構造を目指すのみならず、今後とも活発な経済活動が行われ、誰も賀安全に安心して暮らすことができる都市を目指すことが必要
- ② 京都らしさの継承・充実
 - ・都市活力の維持・向上に向け、自然や伝統文化に身近に触れられる魅力、それぞれの歴史を継承したまとまりのある地域ごとの暮らしなど、京都が継承してきた独自性を一層充実させ、都市格を高め続けることが必要
- ③ 都市空間のマネジメント
 - ・人口減少社会を見据え、限られた財源を踏まえた都市施設の維持管理・長寿化・再活用（ストックマネジメント）、市民や事業者、NPOなどが主体となって取り組む地域まちづくり（エリアマネジメント）、社会経済動向の変化に応じた計画の再評価と見直し（時間軸マネジメント）など、都市空間のマネジメントの充実が必要

3 10年後に目指す都市構造の方向

- ① コンパクトで暮らしやすい地域（生活圏）と核（拠点）
 - ・地下鉄駅をはじめとする鉄道駅（公共交通結節点）周辺などにおける拠点性の強化
 - ・誰もが安全・快適に移動できる歩いて楽しいまちづくり
- ② 公共交通を優先した交通体系
 - ・地下鉄・バスの利便性の向上による公共交通の利用促進
 - ・物流など広域的な都市活動の基盤となる道路整備
- ③ 豊かな自然と美しい景観
 - ・京北地域や左京区北部地域、市街地の三方を取り巻く山々などの緑の保全・再生と市民的活用
 - ・まちなかの緑の充実とネットワーク
 - ・新景観政策の進化による、自然、歴史、まちなりわいが調和した世界に誇れる高質な景観形成
- ④ 活力の源となる産業集積と魅力ある地域のにぎわいづくり
 - ・南部創造のまちづくりなどによる産業集積の強化
 - ・都心部や職住共存地区、観光地などの魅力とにぎわいづくり
- ⑤ 安全で安心な都市空間
 - ・都市のライフライン・基盤施設の防災安全性の向上
 - ・人口減少に伴う空地や空家等の適切な活用促進